

# iSUC の活動理念について

ユーザのユーザによるユーザのためのユーザ会活動

1990年7月

iSUC 実行委員長会議

## 始めに

ご存知のごとく iSUC は、米国中小型ユーザ会 COMMON の運営形態をモデルにして、企画されています。COMMON の運営形態の大きな特長は、ひとつには、強い相互扶助精神に裏打ちされた、ボランティア主導の会運営であり、いまひとつはメーカーとユーザが、互恵的かつ平等な立場にたって、会活動へ参加している点です。米国流のユーザ会では、まず最初にユーザ有志が声を掛け合いながらごく自然発生的に集まって、ユーザ会組織を作ります。任意参加のボランティア活動ですから、COMMON のように、長期的に発展するものもあれば、あっという間に消滅してしまうものも有ります。会の消長は一重に、会の活動方針に負うわけですが、多くのユーザに対し公益的であって、メーカーとの関係においても友好的、互恵的なものであればあるほど、発展するチャンスは大きいようです。

「情報交流と能力開発、教育機会の提供を主目的として、ボランティア主導の会活動を組織した。会員の拡大にともない、メーカーも積極的に協賛するところとなり、現在の隆盛を見るに至った。」

COMMON 活動の歴史を要約すれば、上記のようになるでしょう。ところで我国のユーザ会活動の経緯に照らすと、始めにユーザ会があり、そこにメーカーが参加してくるという、米国流の形には、いささか奇異な印象を持つ方も多いかと存じます。その主な理由は、従来我国のユーザ会の場合、メーカー側がユーザとの懇親を深める目的で、いわばメーカーがホスト役となつて、会を組織し運営する例が多かったためと考えられます。米国のユーザ会の場合、ユーザが自発的に会員相互の社交の場、自己啓発の場としてユーザ会を設営し、そこにメーカーを招聘する。言ってみれば、ユーザ会側が、ホスト役をはたしているのです。ユーザ会をメーカーによる、直接的、短期的な営業活動の延長上に置くのではなく、また反対に対立的な圧力団体とするのでもありません。ユーザとユーザ、ユーザとメーカー、それぞれが信頼と尊敬を基調とした、互恵的交流を行い得るような活動の場としてゆく。このような理念のもとに組織される、米国流のユーザ会のあり方は、合理的かつ実利的なものと言えましょう。そして COMMON の理念と倫理規定が、COMMON の憲章であるとするならば、ボランティア主導の大会運営組織こそが、これらを担保するための重要な組織形態と考えられます。iSUC 実行委員会では、討論の結果ユーザ会活動の将来的発展と、国際交流の深化を期する上で、ユーザオーナーシップ、ボランティア主導の会運営形態については、今回チャレンジすべき主要なテーマの一つであるとの結論に達しました。そこでここでは、COMMON に準拠した iSUC の会運営形態につき、理念的背景にふれながら説明を試み、皆様のご理解とご協力をお願いするものです。

## 大会参加者こそが主役

前述したように米国流のユーザ会活動では、有志がまず集まり会の運営方針を決め、会組織を作ります。会を運営するためにの諸経費は、会費とユーザ有志の無償の役務提供、すなわちボランティア活動によって賄われます。会費は会活動の固定費部分を担う基本財源となります。大会会場費、広報、通信、交通費などの大会準備の諸経費を会費収入が賄います。従ってできるだけ多くの会員を募って、安定した会費収入を得ることが、会を盛り上げ、会を有意義なものとするための必須条件です。会活動は営利を目的としませんから、納入された会費は結局、なんらかの形で参加会員に還元される性質のもので、従って大会参加の全ての会員に対し、“大会参加の権利”と、“会費納入の義務”とは、表裏一体の権利・義務関係を構成します。このような理由で、ゲストを除き、大会役員であれ、スピーカーであれ、会員である限りは例外無く、等しく、平等に、会費負担をする事になります。 大会に有償参加することが、ボランティア活動の第一歩なのです。しかしながら、大会会場に人が集まって話あうだけでは、それなりの情報交流はあっても単なる社交パーティの域をでません。より効率的な情報交流や、能力開発機会、教育機会を期待して参加される会員のためには、しっかりと構成された、話題提供、情報提供のためのセッションを用意する必要があります。

COMMONの大会では、会員有志のボランティアがセッションスピーカを勤めます。セッションスピーカは無報酬で役務提供をする完全なボランティアです。教会のバザールで汗を拭き拭き焼き鳥屋台をやって、売上金を寄付するボランティアと、本質的に同じです。セッション提供は大会に対する寄付行為なのです。

COMMONの場合は、IBM社の専門技術者の他に、独立系のコンサルタントや学者、研究者などが、ボランティアとして無報酬でセッション提供するので、会員は安い会費で有益なセミナーを聴講できるわけです。このようにセッション提供は、自発的な寄付行為ですから、提供者のご好意に甘えるのであって、断じて、強要するものではありません。また、金額の多寡に関わらず謝礼をお渡しすると、厳密に言えば大会会場を会員間の営利活動の場としてはならない、とする大会倫理規定に抵触する事にもなるでしょう。講師謝礼を、薄謝、寸志、お車代など、様々な婉曲的な名目でお支払いするのが我国の社会通念ですが、米国流にセッション提供は講師のご寄付と考え、有り難くお受けすれば、特に礼を失することにはならないと思われまふ。COMMONが今日の隆盛を見るに至った大きな理由の一つとして、ボランティアベースのセッション提供に徹し、会費を低く抑える事で、コスト/パフォーマンスに優れたセミナーを開催し続け得たことがあげられます。

iSUC実行委員会でもCOMMONにならい、セッション提供は会員ボランティアによる大会へのご寄付として、扱わせて頂く事と致しました。会員有志の積極的なご支援、ご賛同を心からお願いいたします。

さて、観客も集まり俳優も決まった。しかしこれだけで公演はうてません。大道具、小道具の準備、音響や照明係、さらに当日の会場案内や切符切りなど、多くの裏方業務を引き受ける人々が必要です。COMMONの場合は、大きな組織ですから、会運営のための日常業務で主要なものについては、事務処理作業を専門会社に委託しています。また会場設営もロジスティック業務も、専門業者に依頼しています。これらの作業は専門的である上、ワークロードも大きく、ボランティアに委ねるのは困難な様です。しかしながら、大会の企画作業や広報活動、さらに、大会会場での当日作業の多くは、会員のボランティア活動によって支えられています。企画、広報、リクアイヤメント等の会運営スタッフ業務は、IBM社リエゾンを含み約80名程度の熱心な会員ボランティアが、一年任期でこれにあたっています。理事、幹事、コーディネータ等の役職名をもつこれらボランティアは、大会参加期間の他に年間15~30労働日程度の時間を、会務に割いています。また大会会場の当日作業、たとえば受付業務、各種案内係、セッション準備作業なども、ボランティアが行います。これらは役務提供の完璧なボランティア活動ですが、多くの会員が少しずつ期間を割いて、交代でやりくりしているようです。さてこのようなボランティア主導の会活動を、可能ならしめる社会的動機付けは、いったい何なのでしょう？ボランティア活動によってもたらされる、実利的、功利的なメリットも、決して少なくないと思われまふ。しかしながら、敢えて高踏的に言えば、ボランティアスピリットを基底で支えているものは、強い相互扶助精神と自己実現欲求、そして名誉心だと思ひます。この名誉も例えば勲章のように、上から下賜される名誉ではなく、民衆から沸き上がる歓呼の声、賞賛の嵐、善行を行う人に対する素直な尊敬の念、と言った類の榮譽です。アメリカ人は大変、褒め上手と言われまふ。たとえ小さな努力、小さな挑戦であっても、それが善行であるならば、それらのポジティブな効果や善意のモチベーションに光を当てて、言葉巧みにしかし心底誉めそやします。誉められることへの面映ゆさもある反面、高揚感を感じるのも事実です。多くの方々は自らの少年期に、一度は世界の偉人伝に出会った体験をお持ちだと思ひます。ワシントンと桜の木の逸話、密林の聖人シュバイツァー博士、野口英世伝、手本は二宮金次郎、・・・・。少年の心は素直に感心してみせまふ。ウン偉いナアー！そして心密かに期するのです。僕だって、僕だって大きくなったら、こう言う人になりたいなーなるんだぞ！少年の日の思い出には、懐かしさとほろ苦さが、同居しています。大人になるという事は、善行とか善意にたいする少年の日の感動を、捨てることなのでしょう？シニカルに構えられるようになる事なのでしょう？そうであるならば、ボランティアスピリットと言うのは、大人になることを拒否する精神作用である、

と言えなくもないようです。

なにはともあれ COMMON では、まず会員が聴衆として大会に多数参加し、次に有志がセッションスピーカーとして、セミナーに参画し、さらに会員の中から志願した、委員、幹事、コーディネーターなどが大会運営に寄与する。会運営への関与の度合いに差はあっても、全ての活動は会員のボランティア活動により、支えられているのです。だからこそ、大会参加の皆様は、お客様ではなく、大会運営の当事者であり、主役なのです。

## ユーザ会活動の公益性

我国ではボランティア活動、奉仕作業というのは、かなり狭義に捉えられるくらいがあります。例えば難民救済活動とか、地震被災への義援金募集活動などの純粋な慈善事業、寄付行為であれば、ボランティア活動としての社会的認知は受け易い。しかしながらユーザ会活動などというものが、社会奉仕活動、ボランティア活動の名に値するほどの公益性を有するのか、と云うご疑念を持つ方もおられると思います。一方米国では、相互扶助精神のもと営利を目的とせず、参加と離脱の自由が保証されていて、社会の公序良俗の発展維持に資するところのあるコミュニティ活動であれば、殆ど例外無くボランティア活動とみなされるようです。したがって、我国における町内会の空き瓶回収、商店街の交通安全キャンペーン、盆踊りの世話役さん等のコミュニティ活動は、米国流ではみなボランティア活動に該当します。しかしながらこれら活動に従事する皆様が、ボランティアを強く自覚しているかと言うと、必ずしもそうではない。我国のコミュニティ活動の多くが、良くも悪くも上意下達的に運営され、参加と離脱の自由、自発的な志願参加を旨とするボランティア活動と、多少馴染まない面があるためではないでしょうか。

ところでiSUCの活動理念ですが、相互扶助、非営利、参加と離脱の自由、と言う観点からは、全く問題はありません。そこで公益性、公序良俗に資する役割について、考えるところを述べてみたいと思います。

iSUCの活動の中で、公益性の高いものを順番にあげると、次のようになります。

1. 能力開発、教育機会の提供。情報処理業務に関する職業訓練。
2. 国際交流。
3. 同一専門職業人の相互扶助
4. ボランティア活動の訓練、実体験。

まず職業訓練機会の提供ということですが、我国ではあまり強調されませんが、計算機利用業務、情報処理業務に従事するためには専門の職業訓練が絶対に必要です。例えば経理担当者には簿記、商法、税法、の基礎知識が必要であり、ヘリコプターの操縦には実技訓練が必須であるのと全く同様です。

情報処理分野の技術革新は特に急速ですから、この分野の職業に従事する人々には教育、再訓練の機会が常に与えられるべきです。ハイテク分野の職業訓練は、我国産業のインフラ整備の一環として、大変に重要であると同時に、公益性の高いものです。これは第二次世界大戦中のエピソードですが、我が帝国陸軍においては、自動車の操縦技能を有する兵士は希少でした。そのような兵を一人でも喪失すると、軍事物資の補給に重大な支障をきたし、隊の全滅につながった例も少なくはなかったということです。一方、対峙する米軍の場合、車の運転技術などは殆ど全ての兵士が、軍務以前の市民生活のなかで習得しており、全く問題にならなかった。あまり良い例ではありませんが、一つの国家総合的な国力というようなものは、案外こんなところに現れるのでしょうか。東西緊張緩和が急速に進展しつつある現在、高度に工業化された国家においては、その国の国力、ひいてはその国の繁栄は、全国民の平等的な教育水準と、平均的な職業遂行能力に、益々依存するようになって考えられています。資源小国で人材だけが頼りの我国産業界において、情報処理技術は産業活動の効率化、高度

化に必須のものですから、これらを良くこなす人材の育成は、正に国家百年の大計と言っても過言ではありません。従来よりかかる情報処理技術分野の重要性に鑑み、各種の人材育成施策が講じられているのは周知の事実です。しかしながらこれらの施策の多くは、過去の経緯からして情報処理産業育成、サプライサイド育成の色彩が強く、ユーザ人材育成、デマンドサイド育成と言う観点はあまり省みられていない。数年前、ソフト産業界を中心に唱えられたソフト技術者不足、いわゆるソフトウェアクライシスに反論する調査報告書が、日本興業銀行産業調査部より出された事があります。この骨子は、ツールやパッケージソフトの整備と、ユーザサイドの人材育成により、サプライサイドが言うほどの危機的状況は起こらないというものでした。経済活動とは本質的に結果オーライの世界ですから、予測があたったとかはずれたとか論じても詮方ないのですが、デマンドサイドの人材育成に着目している点は、炯眼と言うべきでしょう。特に中堅中小企業の情報化を図る上で、ユーザサイドの人材育成が成功するか否かは、決定的に重要な要素です。サプライサイドの人材を正規軍とすれば、ユーザサイドの人材は民兵です。黒澤明監督の名作、七人の侍の場面が目に見えます。プロの侍に指揮された農民の民兵組織が、圧倒的に優勢だった野武士の群れを、完膚無きまでに打ち破る。民兵と言えどもベテランになれば、正規軍以上の技術水準に達し、民兵組織の指揮指導が可能となる。このような技能訓練方式が、システムチックに実施されれば、ユーザサイドの人材は幾何級数的に増大すると思われまます。COMMON の場合、一回の大会に 4000 人強が参加します。約 2 / 3 が初めての参加者ですから、年二回の開催で 5000 人以上の新会員が安価でレベルの高い講義を、集中的に聴く機会を得ていることとなります。オペレータを除いた我国ソフト産業の従事者、いわゆる正規軍が 5 万人から 7 万人と見積もられている現状では、年間 5000 人も新たな民兵の組織化は、驚くべき数字と言えまします。現在のように情報産業の成長が、人材供給をボトルネックとする状況においては、サプライサイドの人材育成もさることながら、デマンドサイドの人材育成がもっと真剣に取り上げられてしかるべきと思われまます。iSUC の現状はその規模に於いて、COMMON に及ぶべくも有りませんが、公益性の観点から会活動が目指すべき第一の目標は、民兵組織、デマンドサイドによる情報化人材の育成機関でありまします。

IBM という特定メーカーのユーザ会で、普遍性のある公益的な教育活動が可能であるのか、との質問に関しては以下のように答えることができます。

我々が目指すのは、速攻性の高い実務教育です。民兵にとっては軍人精神の涵養とか、体力トレーニングとか、用兵理論の学習などを受ける以前に、まず護身用の戦闘技術を覚える事が何より優先されます。自分の武器がマスカット銃であれライフル銃であれ、今使える武器の取り扱いに習熟する事が目下の急務なのです。ビジネススクールにおけるケーススタディのように、実務教育は演繹的に実施されるより、帰納的に実施される方が速攻の効果が得易い。程度問題ではありますが、習うより慣れるでまず一通りの知識や技術を習得した後、理論学習で更に理解の度合いを深めていく。したがって、特定メーカーの特定機種の利用と言う共通基盤をもつユーザ会が、実務教育という観点から教育プログラムを提供するのは、合理的且つ適切なものと言えます。さらに COMMON 及び iSUC では、これらの教育プログラムのなかに、データベース設計、開発方法論、プロジェクト管理などの学術性、普遍性の高いセッションも用意し、単なる実務教育以上の内容を目指しています。また従来より、IBM 社は情報処理の多くの技術分野で先駆的な活動をしており、IBM 製品が、実務的なスタンダードとなっている分野も多い。さらに最近、ソフト、ハード両分野で、国際的な標準化推進の機運が高まっていますが、IBM 社はこれに対しても積極的に取り組んでおり、プログラムの移植性とか、システムの接続性、操作性などのように、ユーザの使い勝手に関係する分野での機種依存性は、希薄化する傾向にあります。以上の諸点からみて特定メーカーのユーザ会活動であっても、実務教育としての公益性、普遍性に欠けるとする理由は、全く無いといえまします。しかしながら、あたかも消費者活動家のように、ユーザ主催、メーカー協賛と言葉で唱えても、メーカー協賛である限りはそれとの関係において、不純な動機を感じる、と主張する方も居られるかも知れまません。だからと言って、それらの方々が我々と同様な意図

のもとに、別途、ボランティアベースの実務教育プログラムを企画し運営したとしても、我々の存在は何の妨げにもならなければ、不公正な競争環境をもたらすものでもないのです。

さて次に国際交流の意義ですが、これはIBM社と言う、多国籍企業の製品を使用しているユーザのみに与えられた、特権ではあります。しかしながら、非営利、ボランティアベースのコミュニティ活動を通じての国際交流は、他国の生活文化に根ざした庶民の社会規範、価値基準等を知る上で、文化交流や留学体験などとは、ひと味ちがった効果を発揮するものと考えられます。今後我国が国際社会で、経済力に見合っただけの責任とリーダーシップを全うする上で、庶民レベルでの多面的な友好交流活動は、益々重要となります。国民大衆レベルでの相互理解が不十分で有れば、ポータレス化する国際経済秩序のもとでは、むきだしの我欲、物欲のみが横行して、人と人、民族と民族の間に、越え難い心の壁、取り返しのつかない憎悪の国際線を、築き上げてしまう危険性が指摘されています。

多面的なグラスルーツ交流の振興が図られる中で、ユーザ会同士の国際交流は大変有意義で、公益性の高いもののひとつと言えましょう。

次に、同一専門職業人の相互扶助、と言う点について述べます。我国では学術的な学会活動を除き、“企業に属する専門職種の人々の横断的な交流”、と言う考え方は殆ど無いようです。企業人同士の交流は、経済団体、業界、企業、専門職種という、立て割り構造の中で行われます。例えば、日本電設工業会の財務会計研究会とか、日本電機工業会の労働問題研究会、などという形です。医師会、弁護士会、建築家協会などのように、法的に専門職種として認知されたもの以外、専門職種の横断的交流は非常に希です。一方、米国においては、専門職種の人々の、職能をキーとしたコミュニティ活動は大変活発であり、ユーザ会もそれらの一つです。米国人の社交好きな性格、強い相互扶助精神、その上に多分、ヨーロッパのギルドの伝統が加味されたものと思われます。ギルドが、その職能分野での人材育成と技術の水準の向上、維持に効果的であったのと全く同様の働きを、ユーザ会は果たす事ができます。

さて、最後のボランティア活動の訓練、実体験の場としてのユーザ会についてですが、ここで縷々述べた理念に則って、ユーザ会が運営されるならば、新たな説明を付け加える必要は無いと思います。ユーザオーナーシップ、非営利、教育、国際交流、この四つが守られれば、日本人が不得意とするボランティア活動の実践、実務体験の場として、ユーザ会は非常に優れたものとなるでしょう。

最後に

COMMONの活動を支えているボランティアスピリット、更にそこから敷衍してユーザ会活動の公益性について、考えるところを述べました。

ユーザ会の志しの高さにメーカーが呼応し協賛することで、メーカーの志しの高さも立証される。我々ISUCの活動も、COMMON、IBM両者間で、既に確立されている、このような高い社会性、倫理性に倅ることがあってはならないと考えます。大会に参加した個々の会員が、新知識を得て会社業務に貢献し、昇給したりする。あるいは、会場で知り合った新たな人間関係の中から、良いビジネスチャンスに恵まれたりする。さらにメーカーの新商品が会員の間で大好評で、新たな注文が殺到したり、ユーザからの改良提案や新製品提案が、メーカーの製品企画に少なからぬ貢献をする。これらのことは、もとより私益の世界の話です。しかしながら、公益に奉仕したら私益も潤った、善男善女に至福が訪れた、正直の頭に神が宿った、現世利益とは善行に対する神様の気まぐれであって無くて元々、と考へ行動するのが、ボランティアスピリットの真骨頂でありましょう。

ダメもと精神にもとずく、無理をしない小さな親切運動こそが、偽善の謗りを受ける事無く、よく成し得る、息の長いボランティア活動のように思えます。

会員の皆様のご理解、ご支援、ご賛同を心からお願い申し上げる次第です。